

堀合先生に学ぶ(6)

信頼関係を基盤にして、一人ひとりへの

対応が始まる　　、九月の保育観察から、

上垣内　伸子

今日の保育が終わった後、堀合先生は、どことなく

がった。

楽しいなご様子である。これまであまり関わりがな

かった子どもたちが先生に近づいてきてくれたこと

◇はるちゃんが変わった

が、何にも増してうれしいとのことだった。まず保育

上垣内(以下H) 今日、二学期になって初めて観察さ

者との信頼関係を作ることを大切にとは、堀合先生が

せていただいたのですが、幼稚園全体の雰囲気落

常日頃から言われ、一学期の保育の中で大切にされて

ちついているなと感じました。

いたことである。保育後の話し合いでは、子どもとつ

堀合(以下H) そうですね。落ちついてきましたね。

ながること、その次にくる子どもへの対応が話題に上

立川(以下T) しょうじさんやはるちゃんの変化は大

きいですね。また、子どもたちそれぞれが、自己活動を始めてきたようにも見えました。

K はるちゃんは、先生をととも意識していますね。

H そうですね。ですから、はるちゃんが見た時、

こっちへ呼んであげると今学期は来てくれるんです。

K 先生の動きを見て行動することが、今日は多かったですよね。また、表情もこれまでよりもずいぶんと和らいで、観察している私の方へも、ときどき見では笑いかけてくれました。

T 先生は今、はるちゃんにとともやさしいですね。

お母さんよりも親切じゃないかと思うくらい。

園庭から戻ってくると、丁寧に上履きをはかせてもらったらしい。あそこまで真心を込めて接してもらおうと、はるちゃんは、先生のあたたかさを感じとるのですね。

K 先生との距離が近くなり、自分が描いたお面を



◀ 先生との距離が近くなる

切ってもらう時も、後ろにくっついて、伸び上がるようにして先生の手元を見ながら待っていました。

T はるちゃん、「あそこまで先生との関係が出来る」と驚きました。

H あの人は、ものすごく警戒心のようなものがあった人です。それに対して、他の人と同じようにぶつかっていたらなおさら向こうを向いてしまうと思うので、一学期はいろいろとやってあげることが多くありました。つながりがつかないと、次が始まらないものですから。

T いろいろやってあげたとおっしゃいましたが、今日あたり見ていると、はるちゃんの苦手なところは十分にケアしているけど、得意なところは彼にまかせている……そこが一番感心するところです。下手すると、はるちゃんを助けなければと、全てやってあげることになる。つながりを持たなくてはと思うと、子どもにまかせる部分がなくなる……。

それが、先生の場合、遊べるような時は見守って、苦手なところで助けるから、はるちゃんにとってはありがたいのでしょね。

帰りの集まりの時も、ここははるちゃんの席というのをとっておかれていましたね。

◇かずきくんが来てくれた

H もう一人、かずきくんも、一学期にはあまり来なかったのに、二学期には来てくれるようになり、今日も、そばで、ウルトラマンのお面を作っていました。

T 先生の方を向いているということは、発展とか進歩につながるのではないかと思います。

H 初めの頃、あちこちへ飛び出して行って遊んでいたの、見守ることしか出来ませんでした。

K そんな子どもたちが、戻ってきたときが大事ですね。遊べているからと見逃すと、つながるチャンス

がなくなってしまう……。

T それが、例えばお面作りを手伝うこと等で子ども
の気持ちをつなげていく意味ですね。保育内容とし
てのお面作りで何を育てるといいうのではなく、つな
がっていく一つの具体的な手段なんですね。

H 活動の内容の意味まで伝えようとしても、今はま
だ判らないのではないかと思えます。とにかく、一
人ひとりの子どもとつながり、信頼関係を作ること
を心がけてきました。そして、これだからそろそ
ろ、いわゆる教育を考える時になると思います。
まず、信頼関係を大切にして、その次のところとし
て、一人ひとりの思いや育ちに応じた対応があるの
です。ですから、その子その子の人となりを理解す
ることも、初めの頃の大事な部分です。

◇先生に向かってきた気持ちを大切に受けとめ
る

T 今日、けがした子がいましたね。

H ゆいちゃんですね。あんな小さなけがでも言って
来てくれるのは、とてもうれしいことでした。これ
まで、好きなことを好きなところでしている子でし
たのに。

T 入園当初はよく見かけた光景でしたが、今時珍し
いですね。あんな小さな傷を丁寧に手当するのは、
ゆいちゃんが来てくれてうれしいという、そこから
出発しているんですね。

H あのゆいちゃんが来てくれたのだからうれしいん
です。あの気持ち、あだやおろそかには出来ないで
すよ。

K あの時、はるちゃんが後ろでずっと見ていました
ね。

T はるちゃんが、ああいう場面を見ていて、一層先
生に好感を持つということがありますね。



▶ けがの手当て

「ゆいちゃんが来てくれてうれしい」

子どもとの信頼関係の成立の重要性について、これまで私は、教育的関わりの基盤となるものとしてとらえていたが、堀合先生との話し合いから、つながりたいと願っていた子どもが近づいてきてくれた、求めてきてくれたことが何よりもうれしいという保育者の素直な喜びの気持ちが大切であり、それがあからこそ、信頼関係を築くということが、単なる保育技術論ではなく、子どもと深いところにつながり、変容へ導く原動力になり得ていくことに気付いた。

◇生活の中で丁寧に関わる

H はるちゃんだけは、上履きを部屋で脱ぐと靴箱の中にに入れておくようにしているんです。他の子には、自分で持って行きなさいと言うのに、はるちゃんだけには、言えない雰囲気があるのです。「あ、戻って来た」と思うと、さっと私が上履きを取って、並べて待っているようにしています。あの人の

持っているよい面を十分に出すようにするために、靴とは関係ないけれども、そういう、靴を並べるとか、待っていてあげるといふような、精神的なことを大事にしようと考えています。

この頃、靴下がぬれているのを、私が言う前に「ぬれてる」とおしえてくれるようになりました。そのことがとてもうれしいのです。

あの人の、初め困ったことのように思えた、「ギヤー」と声をあげるといふような態度の中にある自我の強さを、いい方向に出せるようにしていくには、ある程度、こちらが、ことばでは言わなくても、行動でしっかりと気持ちを受けとめてあげることだと思えます。

K 幼稚園というと、教育の場であり、保育所に比べて生活の場という意味合いが薄くなっているような気がしていましたが、堀合先生が大切にされていることは、幼稚園をまず生活の場としてとらえるとい

うことのように感じられます。

H 昔から、幼稚園は生活の場だったのに、いつの頃からか教育の場であることが重くなってきたようです。

最近の子どもは、大人と同様に、生活が貧弱になっ
てきているし、大人に言われて、やらせられている
ことも多いように思います。「先生に甘えるんじゃないわよ」と言って送り出す親もいます。家庭でも自立を促す面が強くなりすぎているのかも知れませんが、幼稚園ではその子なりの生活を受けとめてあげたいと思っています。

出来る、出来ないにとられすぎ、甘えるということとは、出来ないからやってもらうということで、よくないことだと思われているのかもしれない。

K 幼稚園では、やってもらふことを通しての、精神的なつながりを大事にしたいということなのですね。

靴を揃えることが、はるちゃんの理解力とは直接関係がないように思えるが、どこか根源的な部分でつながっているのではないか。子どもの毎日の生活を整え、気持ちよく暮らせるようにと心を砕く人がいること、そのことによって活動の基盤である生活が安定し、気持ちよくすごせることは、やはり、発達の原動力となっていくのではないだろうか。また、こうした行為から感じられる、先生のはるちゃんの育ちに対する祈りのようなものも、はるちゃんの心を共鳴させ、発達を支える要素となっていくのではないだろうか。

◇自分を出せるような環境作りを

K そういえば、さおりちゃんが、あかりちゃんが今日お休みだというのを気にしていましたね。

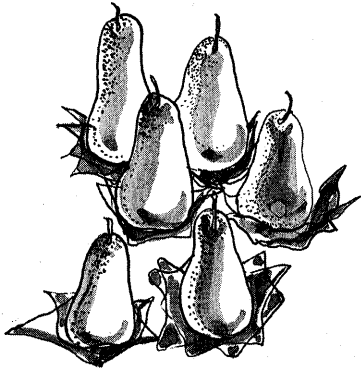
H そうなんですよ。面白いですね。あかりちゃんは、ロッカーに入っていることが多かったけれど、さおりちゃんという友だちができてから、少しずつ

動き始めました。

K どういうきっかけで？

H きっかけは分からないけれど……。

どういうんでしょうね、ああいうものなんですよ



ね。「これだ」っていう大きなエピソードのない方が自然というか、本物のように思います。ただし、そこに至るまでの雰囲気というか環境というかがあって、自分を出すようになる。自分を出すことで、思いがけぬ人と人がくっついたりします。

K たまたま、非常に目だつエピソードに出会うと、「これだ!」と思って因果関係を解釈しようとするけれど、そうではないんですね。

H 因果関係など、はつきりしないのが子どもの世界、何もしないでも変わっていくのが本当。初めは、何とかしてくっつけようとしていたけれど、いくらそういう援助をしても、自分はこうだということとして動かない。だから、直接的な関わりじゃなく、環境に対して配慮をするよう考えています。

環境構成というのは、一人ひとりの子どもの自分らしさが出てきやすいような環境を考えるとということ、遊具をここへ置くというような、目に見える物

的環境とは違います。そこが保育で一番大事なところだと思っています。

「あら、いつのまに」というのは、きつときっかけはあったのですが、それは言葉にならないささやかな出来事の積み重ねだと思うのです。

T 例えば、一緒に帰ったなどというのが、遠因になるかも知れないが、それが、直接の近因ではないというふうな……。

確かにお互いの微妙な影響力があるし、それらを整理して他者に伝えることは非常に難しいことですね。ただ、堀合先生の、根源的な、こういう風に子どもとの関係があつていいという思いが存在し、それが、何らかの形で影響しているのではないかと思うのですが。

K 保育者の願いということですか？

T 下手をすると、器用な先生は、その場その場への対応は見事になさるが、根源的なものの押さえがな

いことがある。堀合先生は、うまく言えないとおっしゃるけれど、その根っこのようなものがあるような気がします。そのうまく言えないという部分が大事なところではないのでしょうか。

K 保育者の願いが、環境ということと非常に子どもに対して効いてくるとは思いますが、幼稚園は集団の場であり、環境という意味では、他の子どもたちから受けるものも大きいように思います。

今日砂場での遊びを見ていて、保育者だけでなく、集団の持つ力ということも強く感じました。子どもたちが互いに環境になるということです。

H ですから、自分のクラスだけ見ているのでは保育者としては不十分だと思います。子どもたちは、大きい組を見ているし、その影響はうんと大きいのですから。大人の私たちどころじゃありませんから。だから、保育者が同じ願いを持って動くことで、幼稚園全体が落ちついてくるのだと思います。園の方針

というのは、何か大きな方針があるというより、一人ひとりの保育者が、園全体のことを考えて動いていることから生み出されるのではないのでしょうか。

一人ひとりの子どもが自分らしさを表せるような環境構成とは、と考えると、保育者が、その子がどのようにつけて欲しいと考えているのかという、保育者自身の保育観、発達観、人間観というものの存在にぶつかる。その部分を、保育者自らが問うことなくされる保育は、目に見える行為に対して、その場その場で対処していくようなものとなってしまっているのではないかと。子どもの心のより深いところに対応しようとする時、保育者には、自分自身を見つめ直すことが求められるのかも知れない。

(十文字学園女子短期大学幼児教育学科)